KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT

ホ 2
4815
2

水2
4815
巻 2

昭和十八年
六月二日
小田寿吉氏
長男吉太郎
氏寄贈

東京都立中央図書館

みなもとより上へうかるてふをは

左

左八 よれるふのこゝろひやうこゝろん／こゝろ山乃ゆきそへくもりつゝぬ涙河 左

同十二 序 いづさ弓ゐきだ本もゐもとゞ〳〵ふりゝこそまされ／こゝのこゝろ 左

同二十 いつふこゝろ紅きちくもバうねのむふしゞ何ぞ明るゝ／ゐ山 左

後十 ゐもかくこもつふこゝ紅系の弓しなるあいづ〳〵ハ／あのかゝるどゝろ 左

後拾四 いをゆるゝ／川瀬の舟はしふしぐゝふまち方人の袖のうゐる 左

拾十六 こゝ紅ゐふゐゝくゝれど／ゐりゐ／ふゐ取せき人のあふ 左

十六又 ちくやゆる形代もきゞ／こ田川／かゝくゐまなみふゐゝくゝと 左

同十八　思ひきや一夜ばかりなれよおもふ人にはこえぬものとは。そ

ぞ

古二　のこりなくちるぞ名ごりなる花にうつりもてよの中はそうれぞ

同六　山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬと思へぞ

同十一　かりそめにとはぬ思ひみぢかきそとごふく妹がたもとかな一つげぞ

同十二　あかつきの夢ぞ袖にのこりける後ぞ袖にうつりもてぞ

山ざとの冬ぞ寂しさまさりける人めも草もかれぬと思へぞ

後拾遺　秋萩を冬ぞ見ぬ風ふきぬとも花さかぬ枝にはあらじ

後拾遺十六　いふせんと山のこゑぞふるぎぬ月をぞ

きりぎりすとふ名ぞ上へうつるさるの秋の夕ぞ。

ぞ

拾十八　こゑばかりゆきてかへらぬ乃里はまちぬ人ぞ

同八　大井川井堰はあふれ乃里はまちぬ人ぞ

後拾遺六　本柴ちる宿をきくにしぬ。かくぶみゆきやいりぬ

金八　はるのやまかひにかくれぬ

新六　夕ぬれあきぬまぢかに思ひをたへざりける

後十六　ひぐらしぬ山ぢかひにかくれぬ

新十七　たくやなれこをの衣ぞ

同四　秋きてくれのをてそ思へ

後拾遺十　ちりぬれぬ人ぞ秋の上ふく風ぞ

○玉のを二

同九 おぼつかな。みやこのそらやいかならん「こよひあかしの月を見るにも

を

古一 たれしかもとめて折つる「はるがすみたちかくすらん山のさくらを

後十一 こまなみえよ「人もとがめぬこひをして袖をなにゝかあらはるゝそらごとを

拾十三 しるやきみ。しらずはいかにつらからん「わがかくばかりおもふこゝろを

金七 よとゝもに玉ちるとこのすがまくら見せばや「人に「よはのけしきを

このをといふ例は。おほくは上へかへれど。又 此をのこゝろを

ほど。ことばは別に五の巻をの部に出せり

に

古二 花のいろはうつりにけりな「いたづらにわが身よにふるながめせしまに

同廿 まちかねていかにしのぶがなかりける「秋霧の人に

同十五 そのかみにおもひそめてしわがやどを見きとつげなん「人のきかくに

拾十二 あきなのゝしき川「よしのゝ山のまつをとて。又なる人もえてぬるころに

此歌は又なる人もえてぬるころに。あきなのしき川といふところをくるの縁まで

まつらをよめるぞ。しかるの山のとりひけるなり

後拾十八 袖ぬれて袖ぬなのひく立ぬれば狭衣さものいぶきしや「よに

同 見にけりつ「おなじもの玉を住吉の松さびにける松のこずゑに

をなにしに。くにこれはおほくはかはりてぞ

て

古二 此里にたびねしぬべし「さくら花ちりのまがひに家路わすれて

同十七 わがこゝろなぐさめかねつ「さらしなやをばすて山にてる月を見て

同十一 夕暮は雲のはたてに物ぞ思ふあまつ空なる人をこふとて。

新十八 おほかたの秋の寝ざめのながき夜も君をぞいのる身を思ふとて。

拾八 をしからぬ命やさらにのびぬらんをはりのけぶりしむるのべにて。

金三 萬代にしるしぞ見るべきたなばたのゆき合の空は雲のうへにて。

新十七 よの中はこころぐるしといひながらふじは煙を身のおもひにて。

古六 たつた川錦おりかく神な月しぐれの雨をたてぬきにして。

後十五 なにせんにへたのみるめをおもひけむおきつ玉もをかづく身にして。

同十八 わびしきを高ねの山はふもとにて何かくもらん都八しも。

拾二 ゆふされば玉ゆらもなきかやのなのいはりのまして。

詞三 夕暮にこむともしらせ山入おのがはの音ぞかりして。

しての類ハみな上へかへれど下にもをふくめていひすてたる事もかり。次ニ引く

古十五 月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身ひとつはもとの身にして。

同 うしみてもなれてもいかんかるあさき鏡にみゆる影ならじて。

同十九 わをのみ思ふといはばあるべきをいでや心は大ぬさにして。

新勅同 万十一 いせのあまは朝な夕なにかづくてふあはびの貝のかたおもひして。（よしくて万）

玉四 安文夫人 野ふかく秋すしみえば虫の音はあふよぞられもまつぞちぢんて。

風十六 式子内親王 日が宿もたちもありゆくひぐれ川の声ほどなくかりして。

で

古十四 いにしへになほ立かへる心かなこひしきことに物わすれせで

新一 「ゑりのこゝろをゑてちりぬ」梅花ちるぞうりぬる人きこひこで

又上へをかつゝびををふあて□でと法びゝゝゝ

千十四 ゝろれてを形えなりゝをゝ玉づさをゝぐさむぞうりゝ花もおうせで

と

古一 うぐひすの笠をぬぎてふゝめむをりてくぐん「老うくるや。」ゝ

同九 みゝゝおそでいざゝゝうん「みやこるゝゝ思ふ人をうりやうゝや。」ゝ

同十七 かゞみひいぎゝをうりて見てゆくひ「年人ゝゝる身をおいやゝゆゝ」ゝ

拾玄 きをうりうゝびいてみやゝへ法ゆゝん「ゝふ白川乃冥ハこしぬ」ゝ

日十八 ゝゝかゝゝハ人ゝりかゝうん「ゝきゝえの松ゝうて一夜祢ゆき」ゝ

後拾一 ゆゝうきゝへゝけ人ゝゝゝばゝゝつてん「ゝふうぐひゝゝゆゝきゝつ」ゝ

古四 月見ばちぢにものこそかなしけれ「ゝきをむゝゝの秋ハあらぬ」ど

後拾二 ゝゝ波へゝ花ゝ仏をゝぐゝ仏「ゝ」ゝふゝゝゝ去ハなルを」ど

ぞと

後十八 宮ゝゝゝりひゝりゝゝと「法をもゝき人のゝゝゝハなゝとゝれ」ぞと

拾十八 ゝをゝゝつゝこゝゝゝ法ぞゝりゝ「ゝ花をしとハゝひゝを」ぞと

そと

古四 萩ゝゝちゝゝん小屋の寄ゝりぬをゝゆゝん「ゝよハふく」そと

同九 ゝゝ代をかぎりもゝゝし「ゝ法の去砂法ゝゝずハよみ法ゝを」そと

べく

古八 山風にさくら吹まきみだれなん｜花のまぎれに君とまるべく　べく

同六 花のいろは雪にまじりて見えずとも香をだににほへ｜人のしるべく　べく

まで

拾八 月するなよ｜ほど八雲のふちやるをしなしつ月ゆめみりいるまで　まで

同十一 思ふまじと思へど名のみたちけり｜君がちぎりをおもやせしとぞ思ふまで　まで

又上へかへりつゞけて下にうけたるてまでとむすびけるハ

古七 わが君を千代に八千代にさゞれいしのいはほとなりて苔のむすまで　まで

千六 冬きては一よ二よを玉ざゝのはわけの霜のところせきまで　まで

ながら

古五 ふみわけてさらにやとはん｜もみぢばのふりかくしてし道と見ながら　ながら

千十九 おぼろ夜のかげにちらさでそよぎけれ｜ちりまよひしをば見しながら　ながら

ものから

古三 ほとゝぎすながなく里のあまたあれば猶うとまれぬ｜おもふものから　ものから

同十五 あまぐものよそにも人のなりゆくか｜さすがにめには見ゆるものから　ものから

ものゆゑ

同四 秋ならであふことかたき女郎花｜天の河原におひぬものゆゑ　ものゆゑ

同十一 恋すれば我身は影と成にけり｜さりとて人にそはぬものゆゑ　ものゆゑ

まに〱

同八 わかれをば山のさくらにまかせてん｜とめむとめじハ花のまに〱　まに〱

同九 此たびはぬさもとりあへず手向「山紅葉のにしき神のまに〱　まに〱

狩上へりくる歌りの格にみな倣しのかゝるもあり。准へもるべし。

○さへく てふをはの辞 さて歌りて。上へうるるこのゝ八ゝげとともみる
その歌りおてふをこの。りゐ。ゐ上の句の切る。和とへうるやうにより
むこゝし。むよりのぎゝるゐをを考ふべし。へ。さ一の点より二のもるゝとへ
久とり。」を他の切るゝ。ゝろ付もるし。御るふ後世は付格をもるで。
歌りおてふをはの或る独自の句をゞへのゝるつて。さ句の切る。和とへ
むかゝらぬ点おちきハみる。むがゝくし。さゞ免の句へきかゝらぬと雅
よりゝゝゞ。ゝゞ切る。和さでへかゝらざれゞ。一首の調ゝのそゞともるべ
し。

さるてふをはの横

む ゝを ゝぞ の や 何 ゝそ ゝさるゝ ゝるゝ ゝるゝ ゝるゝ ゝるゝ ゝるゝ ゝるゝ ゝるゝ む ゝを ハ
横く。ぞ の や 何 ゝそ む さきおふ。京だりゝの格よりて結かし。

古四 おく山ゝ山ゝ山葉ふゝゝを明命の影きくゝきぞ秋む。ゐ。ゐ
同二 ちゝゝ山ゝちゝぬゝとおりわゝを人のゝゝろぞ風も吹あへぬ
後拾一 逢坂の関をや春も古えつゝんおとゝその山のゝさハうもめる
古六 みゝゝ世ゝ山乃ゝ宮ふゝゝて入ゐ。一人のおゝづまを。せぬ
同二 ちゝるゐべゝいぎゝふゆゝん方ゝを君ゝのゝゝそ袖ちゝらめ
同十六 人をおりふゝゝろ本葉ふゝゝばゝそ風のまゝくちゝを礼をめ

や 何 るどゝも体のゐゞとふるどゝへゝん詠へ

ぞ や 何 こそ ハ〜ゆびふ彩ある例る〜 中にやと何 くハ主よいふ一つの橋ふ
の々や、特きあふぞ や 何 こそ〜主あるる 法よし こそ よきる
ろきハ こそ の橋ゆ〜 法び
後十一 ほの出社あふたた〜ま〜ま〜み こそ を々を大く火の下にあグ る旦
るどのゆ〜〜 ゆ三の主のの 彩〜〜くゆ〜〜くいつり
○二主ふそ〜のふるてふをそ
ぞ と や 〜
後十一 志の〜を〜ゆそ日ぞ日るれ〜 技を ぞ 主 や み ① ぞ人のそ ゆる
ぞ 〜 何 と
橋六 いのちを ぞ いろ ふ〜ん ぞハ号ひこ 〜 いきそふ〜ふふこそふそれ

新葉六 後村上院 新こゆる主新の月 ぞ 秋をきそ時 こそ あ主 ぞきやけうり ゆる
や と 何 と
新十八 う主ぶ〜れ人のまぶ〜にうびぬてうりび や 大主 をみゑづむ べき
こそ と や 〜
井蛙集 主を こそ 人 や を る ぞてとげめ 〜う 教る〜ぬ才をいふふそせん
志の方ふ二主ふそ〜のへふてふをはふ〜〜 〜〜 のふ〜
を見てゆ〜ふ〜ぞし〜
米沢賀門 決定本 ゆふゆ〜を主ふ〜後ふ月新 ぞ む〜 も ん き ぞ号ひゆ〜 ふ〜
こまと日ぶ〜〜二主ふと

變格

こゝハ上よりぞのや何等の辞をおびしてぬるつるあるらせる等く
ぬ不 志ゐ おぶらく結ひて。定まる格よりをづしおがしてふをを不調とハ
此ぬるを今かりに変格となづけてしるしに出せり。

ぬる

後一 ふる雪はみのしろごろもうちきつゝ春きにけりとおどろかれ ぬる

同十五 数ならぬ身をすてゝよし野山高きなげきを思ひそめ ぬる

拾十一 みなかみいづる河水をあかずのいかなるハなかしき物と思ひ ぬる

同十六 あまの戸をとぢやそてつる うぶひとの手河に寄せで来も寄 ぬる

千三 さと人は花もてすさみて秋風をまつ河の瀬にてみなハくれ ぬる

同八 春来ぬとおとづれ聞けばうれしくて難波のよしのうちみざり ぬる

新八 をしよりこそはよしもなかりしをたのまれとばかりひてやみ ぬる

同十一 あぬはうらみる色を波よりまがへ河く名葉は浜をなみならび ぬる

同十二 みるめ刈る海人ゆるつゝをはまなかしる袖さへ波の下にくち ぬる

同十八 うれしづくかむよハさてもいかぞとんかりとひてこそへうけ ぬる

同 かしのやまの山河よりてのおもかげをみるに移ろひ ぬる

同 うき身をはくもゐはおしみおしこめてよをそむきたれ侘ぞらび ぬる

つる

拾十七 かしはなるつくまは神のけぐくと家身もつくにいゑを汚み つる

後拾遺四　ヨゲ家ケ一花をのことぞとうつ一極て春のひきうぬ世べ〜ぬし　つる

同七　八重葛千一重社あをかきそへ〜九月までうつろそ〜　つる

金九　春の風ふうねりのゆるそんびう〜社杜の云の糸ちしそて　つる

千四　ちゝなみや云〜社言報の山おろ一に九笠と海乃酒とる〜　つる

同六　やうことを社きま一ろのしう波引ゝ忘てゞ〜このとぐちをとり多〜　つる

新九　ちるぐ〜と多ゞ多ゞ〜べきちゝ〜波をつやゝ一やとゞる被ふうを　つる

なる

古十四　ちひふあひて酒あり山ろのゝゞ被ふやどる月さへぬゝゞ　ぬる

玉十　こひゝゞびて春とあゞむる夕昔昏ゝれど人乃ゝゝがゞ　ぬる

ける

後拾八　春ゝ花秋ち月ゝと舞尼つゝふをとう花とおりてざり　ける

新十七　波戸の翼多をゝゝぬ波の春おりひもゝ〜で宮とうと　ける

続拾十三　ちゞ老ゝるとつゝゝゝ花と少あゞ〜ちうつきゝ〜で人をこひ　ける

せる

後十九　むゞ〜し〜の山路をゝ〜ゝ作よ更てこの赤ゞゝふ行笠て〜う　せる

ゐ〜

詞八　あゝてゝやなみゞ社玉乃をゝ〜ん三ゝゞ一波世バ為てみゞ　ゐ〜

新四　秋のよハゝや世月ゝ一ゝりあゝるゝ古ゝゝりゝゝや三藤之せ〜　ゐ〜

ぬ

源氏　いゝ一へを吹つゝへゝる笛竹ゝ一さへづる多社者さへゝゝ　ぬ

新十八 うぶんは茶屋をのこ神ふぞめ茶てとぞ呂つ人〻ぞふぞ[illegible]もせぬ

ロ十七 茶は日乃ぞ〻は深よ松〻見ていけもう橋〻と〻どちこへぬ

上件のぞどといづともは。浮りの日に歌屋のこ行りてありの下に。[illegible]又よぞどいふ辞を加へて実こと。この方定まりは ぞ〻く。ぬつあり[illegible]せと呂ぞぞ〻ぞ結びてハ。ろりてよろ しがらび。〻味ふるべし。

浮氏 若ぞ函

後拾三 いりせひふりれそをば乃ぞてをぞえの橋ふ梅こまぞひ[illegible]る

ひ乃ふつぎ〻る初よ〻よ〻こ〻ひる〻と〻ぞ〻ふ〻こまぞむ [illegible]るよ〻いふこ〻ふれぞし。芝ていつも准へるべし。

後拾三 いる〻〻んぞよひの西ち〻と〻こ支は久さぞふ寄のかげあり[illegible]る

ひ乃ハ上之のとあるバ変格よハ行〻ぞ[illegible]つるの下へりのをといふ辞を くもへ〻ふ〻ふ〻こ

新後拾八 恋五 基 [illegible]るあぞ〻ハ呂ひ志〻〻ん[illegible]行乃は川いそぐ流ふ松を加へ[illegible]る

後拾一 [illegible]ふ梅ふを乃〻ふすを先や[illegible]ち〻む志をの彼て義て加へ[illegible]

ひ二首ハ第り九下へを〻ふ辞を加へて上へ〻る〻こ

○さべ〻く変格ぞ。ぞ乃ぞ〻ぞ〻ある味のあ〻る〻乃て。その味をんりよ くさと〻り〻て〻る塔様のう〻へ〻てぶいと帰ある〻こ乃て。八代集は 中に也こづ〻て。三十首ふみ〻ぞ。八代集の秘の作者ふハ志の変格のたぐひ ま乃ま ふ〻ふ志ひて〻みぞ〻りふハよ〻むまぞ〻き〻こを知べし。ぞ〻ふ後学ふて。 て〻ふ〻こ〻の定まれる橋わる〻こ〻をぞふ志〻ねぞ。ま〻て志の味ふぞを ぞ。ぞ乃也と〻れまへぞ〻て。び変格のふぞひ〻るをみぞりけよ〻むて

と野まつり。ふあーん人をやふぐきちゝぜ。

○又一ゝさ

後十一　ゑーきとたりひこめつゝ有物を人ゝ志ゝおそぐ　なふ　なると

同十二　おりひして考づとーけるゝ山ゑのちゝへふこりぬちゝろ　なふ　なると

うぎうふの日記　けぢ発あゝきえうつりつる寄よりも宗どのめきゝるえハ　なふ　なると

同　たゝく山のやひやつぐふうすゝ沙ふまゝこの五ゑのかゝる　なふ　なると

うつゝ蕉花　一よぐふ久ーてふゝ沙のまゝくゝあゝ　なふ　なると

同　かゝゝろとたちあしーる發の袖こゝりつるこよひ　なふ　なると

同ゝろのむゝき　けくゝゝ孫の畫までゝ沙自分沙ゝもよをふゝるハ　なふ　なると

後十一　ぢゝぐ川ーあゝぢて孫ざ発もつる物をゝゝふぢりのあや。　なふ　なると

抗十七考く　梅とみる志ちゝゝそゝけくゝりのをまゝ時もなきあ称や。　なふ　なると

同十八　かゝゝちゝとたつゝりあゝちゝあゝで氣袖ぬゝとりのや。　なふ　なると

後抗十一　ゝれゝき沙ゝする人とみ物を沙ゝきをこゝ沙氣や。　なふ　なると

同　沙戸のゆゝ社浦ゝぐ氣のあゝとあゝゝえぬ人志る我や。　なふ　なると

詞十　重のゝ人を月ーぢさゝやふさえ辰まゝこゝぐこゝゝる物や。　なふ　なると

六抗　ゝとゝふゝく於ぎゝる氣乃てる日ゆゝと思ゝまゝる氣や。　なふ　なると

同　沙ひより番私のゆ考社ゝるびゝきハいゝぐ巻の風や。　なふ　なると

抗抗日記　いふゝりときくぞゝる紀義島のよふゆゝるさゝの人や。　なふ　なると

うつゝ撃の役　久されぢまゝねゝる身社ゝるびゝきふ明ゝぐ比の考や。　なふ　なると

同玉ゆづり　ゆゝとゝのゝゝゝゆゝる孫ざ発のワびゝきふ独あゝゝろの美や。　なふ　なると

風土記 いろえぬれと [あふ] [うつる] 紅葉代子とたをめくわふ花もさかりまで

六帖 よの人乃いとをるものをとがとあふあしといそぬハ [たき] ぐうき [あつる]

源氏 おきてゆく元もあらまぬ野ぎまふ [いづく] の森のかゝ永そで [あつる]

後七 えこうあるおそぐふゆるくとが独と私の紅葉と [いづき] [まさ] [まつる]

同九 くやくとまりの又者とゆ人とそうつる河とと [いづき] [まさ] [まつる]

後拾遺 くりりよ月ととが身はれ赤とおぞつうあさそ [いづき] [まさ] [まつる]

同三 吉野ぐくのまちつる紅のくるーさくいうねとうれと [いづき] [まさ] [まつる]

朗詠 くゝべるんとがあうとでとく私萩の花のつうとハ [いづき] [まさ] [まつる]

好忠 夜とゆ紅乃森はをぐうと河ぐ人のしぐうさと [いづき] [まさ] [まつる]

清輔 秋をているハさうはゆみぐどとうつうふ巣く [いづき] [まさ] [まつる]

六帖 をくめうげ記うぎのくへうふる書ハ花のまぐふ永 [いつき] たが [へる]

土左日記 永髪の書くつをべの紅波と [いづき] まさ [まつる] たきゆ [まつる]

拾古 八百日ゆく海のまぐくを [いづき] まさ [まつる] おきゆ 偽

右の件は方丈。あふいづきあぐ〜いへるハ。ぬあうまるぐ結ぶ

べき之まうあ〜ぬ。ふ〜といそで。ゆと結ぐるハ。いく〜名づ〜

〜記はびあるとゆうとバいづきの本まと名ふとあ〜あもま

まゆうゆ。一本ゆハ人。一本ゆハふ〜ふ〜とゆうと。こまと忘へぞ。ふと

ゆうぐ正〜きうはいつべるきど。ふ〜とあるあハ狩ふ〜あ〜て

人ふ〜ぐおふ〜。又黄泉百祭あるハ。たゝ〜久ふ玄字ますて里の字

をゝ〜とあ〜れぞ。ふ〜とゆうハ中〜に記ぐ〜ふ〜て。右のあとを

考へ見るべきことハ二つと出るハミな撰集にて。撰集なるゆゑに。みな同じことのくり返し。
こと改めて見るに。撰集ハよく詠人さかしらを加へて。後に手を改めつる也。
されば此の集など人の手を入ざる方に。
まさしく詞のまゝにてこそ信ハあるなれ。つとむべくうたがひなし。一つ
の證據也。此格なき。右の中に後撰集と源氏物語との詞をのせて。其の人
のしくぶりあるあれし様を證とするに引出せり。

又

新千十四 定方
くのもみぢかさなる時ハそぎすてしが結びねと いづれ ねどへ ぬ

五社百首 後京極
おちたぎつ川瀬のうちの岩の苔も袖のうへに いづれ 濡れまし

こゝろハ上に。いづれといへれバ。結べねる格なきとこそいふべきを。
ぬと結びしと讀るハ。上の件とおなじ格也。

〇又一つ

全二
夜のよ結月まつ人ぞきさびに思ひける雁まつ いく むすびし つ

新五
衣ら川 青きまくらにきびかへや伏見の菱を いく よのへ つ

同九
みやこをば秋とともにぞたちそめし よどの川霧 いく よへぞ つ

新勅 式子内親王
高砂の尾上の桜たづねまで みやこの花 いく へかすみ ぬ

全四
浪路しる夜半の月を時雨に いく よ麻衣 ぬ 浦のうらなる

新四
しかすがにそれと濡る袖の様の雲霧 いく 秋の露 つ 霧の玉づさ

同七
年ふれど宿の花もしぼりていん いく よふかなり ぬ 春のなごみ

狭衣
思ふ事しなるともなしに いく かへり恨みくる ぬ 夜のあけ川波

玉葉
船出して いく かふなり ぬ 夜半を山のむかりにほかき

新二
いく とせ春ふくるを待らしき ぬ あはれと見へみよしのゝ花

同古
いく 年ぐりをゆく月を経へぞてき ぬ 越えし井ハよその月かげ

ものあるといくといつもばつるぬると結ぶべき格なる故。つと
むすびぬと結べるも。上の中にまるとはじめの変格なり。
此格を後世なとおほくよみあへり。又

新古 さればさて萩の下葉を名づけぬおくまで秋はいづくまで来ぬ

これも同じ格なり

本末にゆつる格

あきはや何を結てふをそをおきて末の結び辞をなだ。末なりゆけ
るてをぶりる格也。

新一 うつろふ花の色か袖に霞しあらひそともや やむらしの月にちるらむや

同十二 面影乃かすめる月ぞやどりける春やむかしの袖の涙に

此二首ハ月や花のまやむかしと結べるのハ又が弟なる例をあげてのなりて
いふ本末結一首の事故春やむかしといふ詞也 これてのとまりのけにて
その事になりしいぶてやの結びをと
本末にゆづりてちぶりるの格也

同十八 名が代りし行きなバちかにを玉の緒乃ちくとまでハまちしまたをを

これハちかの名一句を家にこゝろへかするにより かきて行かずバ行きを玉のなにせんと
いふを本末にて玉が代りかなさバ行を玉の緒をせんその玉の緒の長くとまでを
惜まるまじに弟なる物をといふこゝろも本末の結び也な本末にゆづりてなるの
の例のうたをふくまでのとあるるも上なり同じ

拾遺十四 本結まで おのづからいかに待しよの夢路て詫しき人もそれ月ハみせ乃きし

これも名一句ひく本格さだめんとも本しいかに待しよの夢にありてを
んといふを本末にて第二の句をうちの一首の中をこめていふの結びを本
あにゆづりてみとあるに
ミな上の本末とおなど

後拾二 定基 ちりひてあや袖ぬらしせるや露のたまきえ[いく]かの。春をしたくらん△

こは八代集春下にちりてぞちひてをりつる年の内未来ハいくかと何じと思へバ
とりまき本なりて。すゑ句のことを能ちくもいくかといふ句よこゑぞて。みとこおもう。本
あるべハいろをいうとりてるとりていくのてにをはハそのつきを。今ハ本なよゆづりて
色といふもぶれどもいくかといふじと思すいふことをもとめうさてとぢめのらん
も前二の名のやの結びるうっいくの結びハ何とぞ。
うくせぬてぞれすぎれぬべし

新後拾十三 順徳院 いのち[やえ]あぐれちぢの玉まらしそろなに思を惜しぬ身をを

こも八古今恋二いのちやそまふぞはものあぐ袖を何ずし久ぞ来し かしあく
年とつまをなさりてしよませ給つう旬まぞそ露の何ぞ袖きといふ詞をバ本ぶり
ゆづりてそさとをぬくめて何ぞの
本地へりひろまとまつるなり

○右のやく本歌にゆづりる様ハ。そのなかをよしでハてにをはんれがくかるべし。又今お
ぶろすれ人のよむべき袖まとし何しびよしせずでバんれくるれえせずあよるう形んらし。

てにをは不調哥 廿一代集の内をもみと何ぞ。撰者の外ハおほくく
ハおぐるにたくへぐる体なし。ちやくハいしせり。

[き]

五十 はるきさて露おきやしうやまぶきあし[何]とハきげぞろよしもなき [き]
上りぞのや何をおてにをはハあやしくしてきこえぬるな。八代集の中にたえ此
一首のくるなと

新勅十八 袖ぞふかきをすがくころをちぢ見えかきそ涙乃しるはむちれのまどる [き]

玉二 いろふせんろふるやらると心ざらしまろてなびと並そてぬへ [き]

同十 ちぎりしとよろもとれまぬば中立をまづとハあしふちづひな [き]

同十二 人やらハるとがちろろまや我とまさるそろ尤なともくづつみなく [き]

同十七 はきぞ何も尋るも何ぞ美ゆよふよ袖ぞ睦しい身さへそろれ [き]

風二 何しかも霞に花さくみべの里やふむかりそめのてふものどけき

同十三 かきくもる大川人のこゝろの花やあまふ『うらみんとされだそのふしとき

同十七 人乃世を久しとらふも一たれの美ゆうちすてさも難もなき

志き

新六 冬は来て山もかくしハまこのえふりふる松さへ寒さびしき

此歌八新古今の中にあらぬこといつさきなり。をりを兼ねかつまく風に上の句のらうきれことやうにつかへ。後ま上の句もよろしくハ何しくめでたしくハてふ事はのるのハざるあまでもおほべし。上まぞのや何ぞの諍事くて。しきと留めるハ八代集の中にも。此一首のこと。その後の十三代集まても。玉葉風雅よのこみえて。外の集まハ一首とミえしぞ。

玉三 夜山乃嵐が根きよく吹落てなくる秋の葉のいろぞさびしき

同 吹風は竹ういくる夜を秋きぬとおどろくばかり袖にさびしき

同四 ぬるまさる夜更ける孫屋のきりぎりすたえだえになる聲もさびしき

同十四 何まてしめあふ雲ゐをかけらねど見ぐるしきあかつきのこひしき

風四 かきくらし降る白雪の夕やこそ秋よりさればまたさびしき

同六 夕日うつる柳の末の秋風にそよぐさへ秋の音もさびしき

同十三 人こそ何ぞ来さへ思ひてまさらばあだなりけんそれもうらしき

同 花のふ人ぞ思ひの月をいかに見るや『つねにも何かは友にかなしき

同十六 雲しづむ谷の軒端の松ぞときくなれぬる秋の霧ぞさびしき

同十七 ちるをぞてこそやとやふ枕とのくゆするほど涼しきへてうらなしき

おゐよりを上よりしぞのや何ぞの辞なくして。きころとうけたるを。結びたる歌。廿一代集の中に載せたるを志のぬし。かくて右の此首は内にも玉葉風雅よりのこおほくして。其他の集には

たゞ三首ならではなきを以て此格のよろしからぬることをさとる
べし。撥ね字の句にハ古くハすくなく集に まれまれ有をバ なほまて のゝやうなしきんこゞる此外とらひて久しき 玉葉風雅には
あまた件のなぶことの句あるを何ほどさのみハうるさくてもぶき
つきべて此二ツの集にハ。えといふちぢくづしくいやしになれ
あまたる中にて哥をもおそれぞざるといひくれがきて。ことならて
も知べし。故らに後世の人。此玉葉風雅をバ風躰身やしとてよ
ふつひるがしみ。げうしよみいづるあり。此二ツの集おもくゝ。その
や何とからぬしてきた。志きともむまぶかおかきハいふぞや。て
おまはを思さん人は。此格ゆゑくしよむべからじ。調べうくのそぬ
哥のなほきくがめくまてぶくゆがみしくそゞろなる物なりかし

志

新勅 十六 おいぬとも身をむかしと思ひこし〔志〕又秋の来ぬ月をみるかな

風 十七 あらざりし〔志〕涙きしみそうつりそする人まとし人乃見しりけるのを

新拾 十九 あらざりし〔志〕んばくしおいすしへを身の思ひ出とこのぶなしとは

右三首上にぞのや何等の辞なければ志のとまりなれど。たゞ此の哥をあしかとも ドもよみくずれざるなれど。後二首ハあらじ あらざりきと云べき格なり

る

拾 十八 かき流〔る〕こゝろもしらぬことはなけどえてもあらん人やいふらむ

新 四 人よりもこゝろおくりるが見〔つる〕月をしあれ九にかど物ゆゑ

凡 十七 よの中におもきたでらのなげき〔むる〕よしいく徒のなりまし らバ

右三首上にぞのや何等の辞なければ。らる つる むるとうるそのまゝ。格きのなりて切きつきつとみるべく。新古今おそなかめてきくみそよろし

ぞ

古今
よしの川岸より【ぞ】若菜はもえしのえつてよむさしのの原

新勅
このまより風ふきまがふしらくもをしらくとへぞ花と【ぞ】みる

康正
夕されば涼しくなれる山川【ぞ】波の声や秋立つやどは

源氏 末摘花
からころも君が心のつらければ袂はかく【ぞ】そぼちつつのみ

枕草子
紅の花野わけてゆく旅人の袖かと【ぞ】みる

件のかどとはいづくとも その山ぞのそぼ

後拾 十二
いかなれば経て行く世とて吉川人のこゝろふきまさる秋風【ぞ】吹く

此歌いかなればといひて契て雨なくてぞと いつもいかならむぞ秋風のとたゝしくとめてよろし

風 七
心をもえをこめてなるとならば【ぞ】乃あの秋乃とられち

新拾 古
後瀬山のちもとはれんと思ふよ【ぞ】たづねべき物なれば時まてもあらじ。

此歌は万葉に出て。三の句念社（もり）とかける本もあり。[illegible] 後撰六年 [illegible] 又万葉今の本に [illegible] 古歌の例し。[illegible] 撰集に万葉より [illegible] 今よりは [illegible] へきなるべし。

新続古 十七
新陽なる木の葉ちるを そそぎ秋やその山の風【ぞ】みなしむ

このうへは秋や [illegible] 八 [illegible] 風のみ [illegible] き

や

拾 十一
思ひつゝ【や】ねぬ人のふるやまひとれあひつゝやむ萬なし

旧十七
しら波のうちよせつゝよひさへらしてうきたるか【や】さし

後拾 九
こまし【や】よの月みるひとひ思ひゐる山乃ふかくなりけり。

いせ集 こゝ」や

「ちはやふる神の御代にかゝる事ありけるとかや」

やこの〜ちの時も。やの詞びとゝ

ゆびつゝ

ゆびつゝ

ゆびつ

続拾遺 十五

おとうぎを いふ うすきぬ

はいうゆうゆうひはぐし てゝをきゝゝのそびをんある

うさぐゝの説

同 十六

けそゝゆぎき本筆といるハのゝゝねぐそげゝ く ゝゝと山ゆゝの原

同 十八

みやこを ぞまちもとを。ゆつもぐゝあやもきえ山ゆたりゝと

新続古 八

もゝゐゝびの のゝゝぐも 蔦をひて海ゝもよ原き老の猪ぐ見 ホ

同 十七

つもぐもゝゆきゝゝをみよゝ はゝとゆもの ゝゆき つ ゝゝゝゝゝゝと

ちのあぐしゝゝゆぐをゆぐゝあゆぐ

はゆぐゝみゐむぐゝゝゝゝと

拾六

猪ゆ ゐ を神ゝそぬ 弟れ ゆゝゝ乃ちづゝゐふのゝハあやせぐゝゝゐん

上を ゆゐぐゝゝゐひてゆゐゐとゝ猪ぐゐゝのゝぐ。ゆゐぐゝゝゐゝゝ ねゐあゝゝ猪ぐ

べゝゆゝゆゐゐゐゝゝハ。上を ゆゐゐゝゝゝゐゝゝゝ

同 十二

弟がゐをゐゐゝゝゐゐゝゐゐゐ くゐ むさび ゝ 秋ゝ今とかゐこの ぞを

ぬゐゝゝとゝゝゐゐぐ下を かゐゐぐゝゝゝゝと猪ゐきをぞゝと猪ゐハ ゐゐゝゝゐゝ

かゐゐゐぐ ゐゝゝハ。上をゐゐゐれどゝゝゐゐぐきゝぐゐゐゐゝゝゝハ字ゝ猪ゐゐゐ

金八 ゐゝゝゝを 妹ゐゐゝゝ先や猪庭ゝゝて山のゐづくゝゝ 秋ぬゝゝを ゝゝハ

ゐゝゝゝゝ猪ゐゐゐ ゐゐと

ゐゐゐ

後拾遺 十八 みちうきを人の法こきこゆふそそぎといと【ど】ゐるをかりそめ

けぢをぞを軍一ゐやすかるべしおそそ八切こをう

こそそれのそ示をそにるひぐこ

同 十六 かこそうるまこもこ【た】や郭るるまもるくを昭海こう邪

けぞハぞの軍一得うるべしの八ぞそやの倶あそも見べぐこ八切を

ぞれぞぞりのこゆふかゆるぞやこらひそるゆこ八軍に

後拾遺 十三 春霞たちやゲ下ぬしみぐるをばい【は】や月日たちゆくとるこ法

けまハさを軍一得ようて

いそやるべし

後撰 十七 ひのもこたちるぎさまるこぐやみやこるをひし一絶そるひこ【む】

けぞハぬの軍一ゐやすちるべしぬこ

おこそれぞ上あやの法びそこのこぞ

古今集 二 花【ぞ】あやみひよるとわくに倍そめてやこ示絶をきこをこうそそこる

同 かぐこつこころ【ぞ】花手一ぬぬをど老法そがこのこるをやこそる

狭衣 ぬこ八乃まこ【を】うに法てあるとあるこをきき春九秋の稲ぐ名示

けをハをの軍一ゐやすちるべしぞふ行こ

ぐをばゆこ法ぐこゆふるのひぐこ

堀川 後夏 こそをなきこ心乃やこあるまひつくえてそをここと稲月たちうこ【を】

けをハをを軍一得をるべしのこをこべえこそをこぬこうえぐれぐこ

なぐ八ぐ軍こをこぬこうをこ八ひぐこ

○変格示同じくて不調奇

古今 十九 恋こきこ方をかここてうこきけたそをれぐをあぐこち【さる】

けさこる一ゐを八こゆこ法こ行をど

そをもこゐここ八きここぐ

後十二 まをこゆまぬ和ここうこそちをぐゆこうこたわこぬここちのこ【さる】

新十七 わこをこてこ八日ゆ中をこ七へぐここをちこのこをこへこるちちのこ【さる】

あぬ人をまの秋風ぞそよぎそよぎ　[illegible]

夕ぐれ　[illegible]

萩の葉にたゝぬ人をまちぬるかな　[illegible]

いづくにか[illegible]

ぬるゝあるこゝろぞ[illegible]

たゞごりに人[illegible]

こゝやさびしらるゝ[illegible]

右の[illegible]

ぎふきゝえてそのえび

一本ふてふをはを孚ー謌ゝる事

ゝと、一代系は中にてふをくはもぐこゝろ。偖ゝる本ゝ[illegible]。

今ゝこゝ加ゝとの本ゝとゝ考へ合せて。写ー[illegible]の図ゝ[illegible]。

まゝ方をバ。その右はゝ[illegible]

はゝぎに人まの[illegible]

ゝがまゝぬ年ハまゝ[illegible]

うにゝ[illegible]

むゝぎゝ[illegible]

ゝゝ月は[illegible]

[illegible]

月十九　秋の雲に春を化荒乃身をへうゝ　ちぞ　ゑ　ゑのうひよと　[ん]　おく

此句拾遺のたりじ　去年の本に　[ハ]　ぞ　と　[ゆ]　上　[り]　あそ　く　いへ
[ま]　ぞ　ゑ　ゑ　ゑ

月十一　ものゝあはれのそこうわ〜徒をぞ。あやふ〜人の[の]とがむふ

月十二　白川の流のいとあさみぞとつるをぞ。人をまつといふなる[る]

月十三　をかなくてたえぬんくとけ糸ゆりなあくゝおわくかひと[さゝん]

月十七　うゞ人もなれるはあ波をゝ[ぞ]ゝ〜ハぬ。

月　流つ流て〜それ公ゆ弾みゞりゆんゆうゆ〜せ〜ふ神[ん]むちふき。

月十九　かゝ表ゝ川日をゝゝふきく人をゝへさゞりゆ秘もゝひじ[を]

拾二　ひゞ川の拾拾て嘆ゝ和〜定ゝたゞゝゝ乃表ゝを〜[ぞ]

月十六　ゝゝ〜をく〜ゝゝぞおと[ふ]流ゝぎむの対をきゝゝぐ〜ゝちのゝゝて

月九　いをゝ〜じあゝたりくのぬゝ〜〜ゝバ拾おりひりゝゝく人ゝ〜ぞ見[ま]

月十八　津のふおいく四ゝりりのいく波ゝ流ゝきんを糸[ふ]ゝゝ〜ん

月　はのこふゝりをゝにのふくおゝと[へ]ぞゝゝれ[を]雅波の伝のゝ〜ふゝぞ

月十五　ちひもふばこひもゝゝやゝふばこゝりゝ人ゝ〜ゝつゝとゝ[き]

後表一　花見て[ぞ]男ゝゝ花ゝゝもゝすゝ海〜表ゝ波ゝ波ゝゝ〜ゝバ

月七　岩ゝ流ゝゝれのゝゝ〜糸たえせで[ぞ]久〜くよ〜ふへつゝゝるべき。

月十　こゝりゝゝと人のゝゝゝを思ハ〜ゝゝゝゝ長ゝ風[ふ]ゝ〜[やと]

月十八　おりひゝゝゝゝとゝ月ゝじとゝ月ゝつまでゝゝとゝふゝぞ鶯ゝれぬ[ま]

金一　山吹ゝ〜ふきゝゝ風ゝ山ゝひゝゝば八ゝゝゝゝを[む]ちゝゝゝ海

月二　和〜花のゝゝ祭ゝ月ゝ〜ぞ嘆ぬまバ雷[と]ハゝのゝかゝるゝりゝゝ

月八　ゝゝゝゝ海乃ゝゝゝ〜ゝふのゝれ月ゝのゝ〜ゝ[く]ゝゝぬいゝゝひゝ

月　拍をゝ〜ぞ恵べでいゝ[絲]いゝ〜ゝのりゝふのゝゝりゝゝゝ海ゝ邪—

千一　さしぬ[やと]ちゝぬ山ぬ[ゝ]ゝ[ゝ]ゝ[ゝ]ゝ

○上の。一かに天をんを写―侯ものあの中に写る。古今十九の紙の裏ふ書あるき系のうちと
いつるのけてふをはのう。出るのそりじをそとまるとき。上のあぞようよりじまて。冊の
嗚呼ふかて。見ぐ系のかひを伝ぞよといつるさく。殺るをのぞとうの辞上ヨ左で。下によ臣
あるあう―。さハ生とう受つきやうあと。右ぞ。右のおとゝふるとに八。
あぞの辞ハよりじまでへかゝて。その下へを及ぐるあふ。そりじ結てふをえ不調り
行ゝび。ちうきぞとあ不かひよえあゝとあるぞ。ゝもあゝやをゝるふ出のゝる。ゝりじ
あるぬを。見ぐゝひのかひよとつよが系の何るて。あぞハそとをとげをゝとる他者の羽し。